共同研究

万休院仁叟の世界

さとう　たくみ

この二・三年来、私達は海部・水軍の拠点を求めて、会員宮下良明氏や御手洗義夫氏等の案内で西上浦、戸穴方面の史跡を幾度となく探索して歩いていた。その中で特に気にかかったのは仁叟という人物のことであった。

彼の残した碑文は郷土史を探究する我々に大きな示唆を与えるものであったし、彼が開基した万休院は更に謎を含む存在であった。その万休院について『佐伯市史』には次のように記載している。

万休院

（佐伯市戸穴）

万休院は臨済宗で、もと堅田城村（山王祠付近）にあったが、仁叟原恕が、戸穴村願成寺の住持になったとき、願成寺末庵として戸穴村平野に移したという。佐伯鶴谷は南海部郡史に、南海部郡役所の社寺明細帳から、万休院の創始を正徳二年（一七一二）としているが、仁叟の願成寺住はこのころと見てよい。寛保の御領分中寺社記に次の記録がある。

享保十九甲寅年（一七三四）二月二日、古来（？）の一札を以て、願成寺隠居仁叟願いに付、養賢寺末寺を仰付けらる。その後一旦荒廃し、天保二年（一八三一）再興された。

この記事の内容は後ほど検討するとして、仁叟の生年を明らかにする宝篋印塔（ほうきょういんとう）が万休院に残っている。宝篋印塔とはいっても、地蔵尊の後背に緑泥片岩の薄板を立てて碑文を刻んだユニークなもので、形式にこだわらない仁叟の性格をよく表わしている。

仁叟の宝篋印塔

自ら「万休老人」と記しているように、老境に達した仁叟が、父母の供養のために大乗妙典一石一字を漸写して造立したもので、正面中央に「宝篋印塔」と文字を刻んでいる。このとき享保一九年（一七三四）秋、行年六八歳であった。

ということは寛文六年（一六六六）の生まれで、彼が活躍した時代は六代藩主高慶公の御時世である。高慶公は元禄一四年（一七〇一）に入封して以来、藩政の刷新を図り、学問・武芸を奨励し、殖産工業に尽し、神仏を崇め神社仏閣を創建改修した。佐伯藩中興の英主といわれている。養賢寺の名僧乾堂和尚や、灌漑用水路の開作に功績があった小林九左衛門などは仁叟と同時代の人物であった。

しかし仁叟が何処の産でどのような経歴の持ち主であったかは、残念ながら不明である。彼の活躍が我々の目に触れるようになるのは、願成寺第四世の和尚（従持）になってからのことで、残された碑文の中に当時の世相や人間模様、仁叟の心の内を垣間見るに過ぎない。恐れ多いことであるが、彼の事跡をたどりながら仁叟の世界を追体験してみよう。

祖柱蔵司のこと

昔、祖柱蔵司という人があった。若い頃親に逆らい、悪行を重ねて、遂に捕らわれの身となった。数年後赦免となって帰って見れば、家は荒れ果て既に両親の姿はなかった。懺悔の心を抱いて養賢寺の門をたたき、仏弟子となって念仏三昧の日々を送る。後に上直見村竹ノ下鬼越（おんのき）の庵寺に住み、晩年父母に供養のために一石一字の漸写をなし遂げ、その銘文を願成寺の仁叟和尚にお願いしたという。

『直川村の文化財』より

このとき寳永元年（一七〇四）十一月、仁叟三八の歳、宗恕と号している。二人は修業の時代に養賢寺で知合ったものであろうか。過去の罪業に報いんとする祖柱蔵司の一途な生きざまに、深く心を打たれたに違いない。

善理道庵主のこと

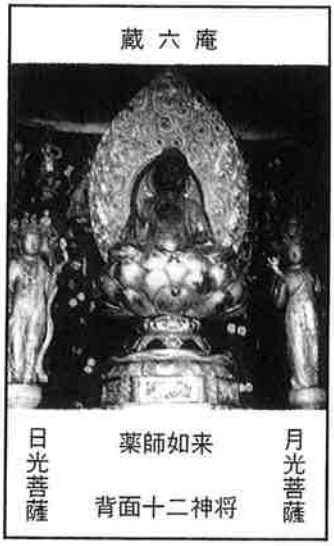
昔、戸穴村の亀井山に蔵六庵（元大宮八幡の神宮寺）があり、善理道という庵主がいた。

彼の父飯沼郷甫介は稲葉家に仕えていたが、事情があって津久見に逃れ、仕官の口を求めて東奔西走したがかなわず、やむなく故里に帰ってきた。

善理道は性海和尚（養賢寺第四世）に師事して後、草庵を営みながら四度移り住んで、最後にこの亀井山に至り、仁叟の力を借りて草堂を造営した。更に志を立てて日本各地を巡回すること三年、帰ってきて浄財を募り、薬師如来、日光・月光菩薩、十二神将を建立した。正徳四年（一七一四）再び四国に旅立つ、巡礼を終えて帰り、安息の間もなく病により世を去った。正徳六年五月二十日、善理道六八年の生涯であった。

『善理道庵主の碑』より

仁叟は善理道の仏の道を求めて止まぬ生涯に感銘して、「大河の源も一滴の水に始まる。膝がやっと入るほど小さな茅堂をこれほど荘厳に導いた善理道は、中興の開基である。禅を求める者、始めに願う心なければ、彼のように終りを全うすることはできないだろう。」と碑文を誌し、岩佐氏・大神氏の協力を得てこの石碑を建立したのである。仁叟は既に五〇歳の年齢になっていた。



万休院の開基

佐藤蔵太郎の『佐伯志』には万休院について

享保十九年の創始にして開祖を仁叟と云う、郡衙の明細帳には正徳二年の創始にして……

とあるが、「正徳二年（一七一二）に願成寺の末庵としたのが始めで、享保十九年（一七三四）に改めて養賢寺の末寺に仰せ付けられた」というのが真相であろう。

万休院の裏山は俗に河内城と呼ばれる古跡で、周囲には馬場・仮屋・的場などの地名が残っている。その古城跡も雑木に覆われ、古墓は守る人もなく土に埋もれ苔むすままに見捨てられていた。願成寺の和尚仁叟は、由緒深きこの地に霊魂さまよう有様を見兼ねて、供養の志を発願し庵寺を築くに至ったものであろう。境内には古い五輪塔の水輪に四仏を刻み積み重ね、層塔に見立てた異形の供養塔が残っている。

また観音堂の前にある御影石の手水鉢と石灯篭に正徳八年（一七一八）の銘があるから、万休院の創始は正徳年間に間違いはない。

異形の層塔

彦宮三所権現の由来

その後、享保一〇年（一七二〇）四月、宮野内の彦宮三所権現社が修復落成して、村の代表が万休院の仁叟に棟札の銘を頼みにやって来た。お宮の棟札を寺に頼むとは、いささか勝手が違うが、彦岳は神仏混淆（こんこう）の霊場である。仁叟は里に伝わる諺（ことわざ）や古い棟札の年号を考え合わせ、彦宮の由来を書くことになった。

彦宮三所大権現は豊前の彦山大権現の影向（ようごう）にして、本地は弥陀・薬師・観音の三尊なり。この神明は云うまでもなく人の知るところである。

里の諺に伝えるには、北に大山あり、五浦を踏み六邑を跨いでいる。初めの名は知らないが、神がこの山に影向してより彦岳と呼ぶようになった。

東に小嶋あり、南北に嶺遠く東西に渚が近い。北崖の頂上に奇絶する地があって、松ノ下と呼んでいた。昔は大きな松があって覆蓋（ふがい）していたのだろうが、枯れ果てた後は幾百年も草木の繁るのを見たことがない。よって神また飛遷（ひせん）してここに来たる。故に彦島と呼ん

だ。

それ以来、神明の感霊が甚だ厳重で、拝むことなく過ぎる舟あれば忽爾として転覆させてしまうので、漁民が話し合って、これを勧請して宮を移し、彦宮三所大権現として尊崇した。今もって夏冬の祭祠は怠慢なく続いている。この浦を名づけて宮ノ内と云う。ああ三所の字も寓言ではなく、誠に故あるものである。

彦島　松ノ下

しかし神明の影向が何時の時代であったかは明らかでない。ただ文亀年中に誌された棟冊の銘が半片残っていて、修造の年号を記するに建長三年（一二五一）をもって初めとする。

その後四十五年を経て永仁三年（一二九五）二月三日に造営上棟、同三月三日に遷宮。

また五十二年を経て貞和二年（一三四六）正月三日に社務大神惟年これを営建す。惟年はおそらく戸穴村八幡宮の社務で、兼ねて当社を祭っていたものであろう。八幡宮の仕官は大神氏である。

また百五十六年を越えて文亀元年（一五〇一）十一月十五日上棟・遷宮、大檀那は先の領主大膳大夫大神朝臣惟勝これを修復す。社務は大神惟俊、大工は藤原則正であった。

また二百二十五年にあたって、今年享保十年（一七二五）三月朔日より修復を加え、四月十一日に落成に至る。同二十二日に粛んで遷宮しおわんぬ。（後略）

仁叟の書いた棟札は神社に現存しており、銘文の写しが当時の庄屋であった池田家に残されている。

太古より連綿と続く海民の営みと信仰、歴代領主の尊崇。このようにすばらしい神社の由来と修造の記録

海上より彦宮神社を仰ぐ

を、仁叟でなくして誰が後世に残し得たであろうか。

大乗妙典一石一字塔

それから三年後の享保一三年（一七二八）仁叟五九才の年に経石塔二基の銘文を残している。一つは上野村西運寺の境内にある小林九左衛門の供養碑で、この時は何故か養賢寺看司として署名している。

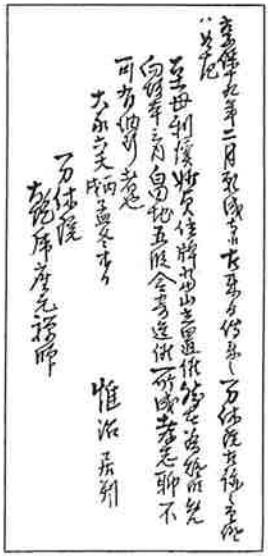
もう一つは堅田・中山の山王神社境内にあり、仏弟子高畑氏の求めに応じたもので、西野村円通庵の庵主不白が助筆をしている。この二つの碑文は益田学氏の『郷土佐伯の碑文』に詳しく紹介されている。

万休院の境内には享保一五年（一七三〇）の経石塔が残されているが、施主は代後浦鶴野小兵衛、晞干浦石田吉兵衛他七名の名が刻まれている。彼らは万休院の檀家ではなく潮谷寺の門徒である。「経に曰く、大乗妙典は経中の王なり。」と仁叟も書いているが、【大乗】とは「仏教の深遠な義理を説いたもので、慈悲博愛によって一切の衆生を救う意」と『漢語林』にある。この石塔は後世、銘文の一部が削り取られ開基中興の碑となり代わっている。

万休院の由来

ところで『佐伯市史』に「万休院はもとより堅田城村（山王祠付近）にあった」とする根拠がわからない。また『寛保御領分中寺社記』の記録「享保十九甲寅年二月二日、古来の一札をもって、願成寺隠居仁叟願いに付、養賢寺末寺を仰付けらる。」という古来の一札については、加藤健一氏（元社会教育課長）より貴重な資料を頂いた。

それは次のような文書である。



右訓読

享保十九年二月、願成寺へ古来ヨリ伝来ノ万休院古跡ノ印證ハ左ノ如シ

至母、利渓妙貞ノ位牌ヲ当山ニ立テ置キ候、勝尾ヲ灯明免ト為シ、向坂本ノ内畠地五段ヲ合セテ寄進候。一所孝志ト成リ聊(イササ)カモ油断有ルベカラザルモノ也。

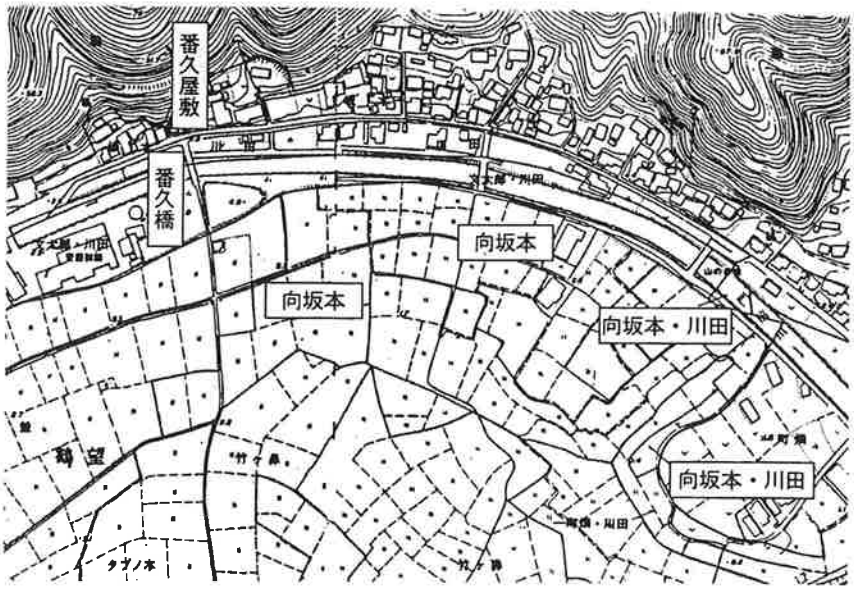
大永六天丙戌孟冬(二月)杏　　惟治　居判

万休院

乾乕座元禅師

これは願成寺にあった古文書を仁叟が写したものであるが、驚くべき佐伯惟治の文書で、母の菩提を万休院に安置したことがわかる。しかも灯明免として与えた勝尾と向坂本の所在地が栂牟礼城下の脇地区にあり、この地区に伝承される「番久屋敷」の口伝を裏づけている。(向坂本は番久屋敷の対岸にある田畑で、今両岸をつなぐ番久橋がかかっている)これによって当初の万休院が脇地区にあったことは疑いのない事実であろう。

この文書の翌大永七年(一五二七)の惟治落城の後に、どういう経過をたどってか、現在地(戸穴)の万休院に



落ち着いたものと思われる。

万休院は元々惟治父母（大神氏系図では惟著に万休院と付している）の菩提寺であったから、惟治の後を継いだ惟勝、惟常にとっては祖父母にあたり、それなりの配慮があったと考えるべきであろう。

その後、文禄二年（一五九三）に佐伯氏は改易され、檀那を失った寺は荒廃し、江戸初期になって願成寺の管理する所になった。と考えれば、古来の一札の由来は理解できる。しかし『佐伯市史』の「万休院が仁叟の時代に中山から移された」とする説には疑問が残る。これは万休院の変遷に高畑氏の関与を示唆するものであろうが、その出典が明らかではない。

それにしても、惟治文書に対する仁叟の執着は尋常ではない。たとえ郷土史に堪能で、故事来歴を重んじる僧侶の職にあったとしても、おそらく彼は佐伯一族に縁（ゆかり）ある家の出身者で、その血が騒いだとしか思えない。

仁叟の生涯

彼の事跡を一通り追ってみたが、養賢寺の乾堂和尚が城下の武家を相手に教義を広めたのとは対照的に、仁叟は戸穴村にあって、常に庶民の生活を見続けて来た。それは不公平な枠組みの中であえぐ民衆の姿であり、求めて止まぬ人々の生きざまであった。村人の喜怒哀楽は、そのまま仁叟の人生でもあり、御仏の教えこそが彼等を救い自ら救われる唯一の道であった。

享保十九年（一七三四）二月、養賢寺の乾堂和尚が六十余才で宝林院に隠棲した。時を同じくして、仁叟は古来の一札を写して養賢寺の末寺を願い出た。自らも隠居をするにあたり、万休院が願成寺から独立して後世まで存続できるように計らったものであろう。

同年八月、父母の供養のために一石一字を漸写して境内の一角に宝篋印塔（ほうきょういんとう）を立て、前立ての地蔵尊を据えた。思えば善理道庵主が六十八才で没してから十八年、仁叟もまた同じ年齢を向かえていた。この宝篋印塔は父母の供養と同時に自らの逆修墓でもあった。境内の歴代住職の墓石の中に、仁叟の墓石が見当たらないのはそのためであろう。

死後、仁叟の魂は「六道の衆生を教え救う」という地蔵菩薩になり代わって、慈悲深く柔和な御顔で世の移り変わりを見つめて来たのである。

万休院仁叟の事跡

年号		遺作	所在地	著名
寶永	元年（一七〇四）十一月	大乗妙典一石一字漸写之塔	（上直見）	本正山願成禅寺住持小比丘仁叟宗恕謹
正徳	六年（一七一六） 六月	天真善理道庵主の碑	（戸穴・折戸）	本正山願成禅寺住持比丘恕仁叟書
享保	十年（一七二五） 九月	彦宮三所権現棟札銘	（西上浦・宮野内）	養老峯下萬休院住持比丘伝法沙門仁叟原恕
享保十三年（一七二八）	初夏	大乗妙典一石一字漸写之塔	（弥生町・西運寺）	龍鼎山養賢寺看司比丘仁叟原恕謹書
同	秋九月	大乗妙典一石一字漸写塔	（中山・山王神社）	養老峰下萬休禅院住持比丘仁叟原恕謹誌
同 十五年（一七三〇）十二月		大乗妙典一石一字塔	（戸穴・萬休院）	養老峰下萬休禅院住持比丘仁叟原恕謹拝書
		（同右後世の付記↓）		願成五世養老峰萬休開基妙心第一座仁叟座元禅師
同 十九年（一七三四）	二月	願成寺の古文書（惟治寄進状）を写す。		
同	秋	宝筐印塔（一石一字塔）	（戸穴・萬休院）	万休老人恕仁叟謹拝書 六八歳

万休院歴代住職（墓碑名）

開山	仁叟（原恕）和尚 隠居	享保十九年（一七四三）	代不詳	要道祖玄知蔵 文政 八年（一八二五）
二世	第一座霊塔髄座元禅師	明和 元年（一七六四）	同	妙心第一座彦岳輪和尚 安政 元年（一八五四）
三世	瀧山原玲首座	安永 二年（一七七三）	同	梅庭座元 明治 十年（一八七七）
四世	遠延首座	寛政 三年（一七九一）	同	玉鳳三玄和尚禅師 明治二七年（一八九四）
五世	敏格首座	同 右		
六世	松覚祖栢首座禅師	文化 元年（一八〇四）		

※開山 仁叟和尚・中興 桂岳和尚・再中興 養州和尚